

基調報告

「実感のある学びをつくる総合学習」と私たちの「教育課程づくり」

和光鶴川小学校

行田稔彦

1. 自ら学び始めるとき

子どもを学習主体に育てたいという願いは、教師と親の共通の願いです。「自ら学ぶ」とは、どのような状態をとらえて言うのでしょうか。そして、どのようなとき学びは始めるのでしょうか。子どもは、問題が子ども自身の課題になったとき、教師の枠から飛び出して学び始めます。子どもがどのように問いを持ち、主体的に探求していくのかをタヌキにこだわった学級（和田学級）の実践からとらえてみることにします。

能ヶ谷地域の町探検に出かけた3年生が、道路標識と並んでたっている「ためきに注意」の看板に注目しました。能ヶ谷地域は、つい最近までタヌキの生息する雑木林が残されていた自然環境に恵まれた貴重な地域で、自然を守る運動を進める人々が「タヌキ実行委員会」をつくって活動していたところです。残念ながら、今は、開発の波に追われて宅地化されています。先生は、子どもたちのこだわった謎を子どもたちとともに解く事にしました。町田タヌキ実行委員会の桑原さんの話を聞く会を持ちました。

子どもたちのタヌキへの関心が高まりました。教室には、タヌキ情報が集まり始めました。稲城市にある小学校が校庭に迷い込んできたタヌキを飼育しているという新聞記事やタヌキの食べ物、すみかなど情報カードの発表が行われるようになりました。

そのころ、鶴小の雑木林の奥を通る道でタヌキを見た！？という話が職員室で交わされました。その話を聞いた3年生は、なんとしても、「鶴小のタヌキ」を確かめたいと思いました。子どもたちは情報カードをヒントに作戦を立てました。まず、「えさ作戦」です。一晩仕掛けるとえさが無くなっていました。しかし、タヌキが野犬かネコかそれとも別のものかわかりません。つぎは、足跡から獣を見分けることができるという情報を元に「ピタピタ作戦」がとられました。足跡をとらえることには成功しましたが、それでもタヌキと確定することはできません。10日以上もすぎた頃、先生の仕掛けたビデオがタヌキの姿を捉えました。今度は、タヌキにえさをやり続けるかやめるかが子どもたちの対立問題になりました。タヌキ実行委員会の桑原さんをゲストに招いて、クラスで、大討論会を開くことになりました。子どもたちは「えさをやり続ける」「やめる」「とらえて飼育する」の各派に分かれて討論になりました。最後まで聞いていた、桑原さんは、「みなさんの今日の話は私たち大人の討論と同じです。野生のタヌキと人間がどのようにしてともに生きたら

いいのかを話し合っていたのです。」と、真剣に討論した3年生をほめてくださったそうです。こうして、タヌキを通して地域の自然と人間の共存共生の課題を3年生らしい目線で学んだ子どもたちは、4年生になって、タヌキ実行委員会ジュニアを結成しました。

タヌキの噂の段階からタヌキ実行委員会ジュニア結成までの間に、子どもたちはたくさんの情報を集め、さまざまな作戦を実行しました。鶴小のタヌキを知りたい、見つけたいという意欲が、子どもたちを突き動かしたのです。タヌキを探ることが子どもたち自身の課題になっていたのです。子どもたちは、情報を集め、試行錯誤するプロセスで、調査・作戦・実行の主体になっていったのです。はてな、ほんと、ふしぎ、どうしたの？という子どもに生まれる「問い」が学習の出発だということができると思います。

2 , 子どもが求める学びと授業改革

(1) 学級崩壊も学力低下も根は一つ

社会の政治的・経済的・文化的行き詰まりと深く関わりながら、子どもと教育の新たな困難が広がっています。それは、「学級崩壊」や「新しい荒れ」と言われる事態に象徴的に現れています。99年9月13日、文部省は学級崩壊102の事例を収集・分析し「7割は教師の指導力不足」と考えられるものがあつたが、「3割は指導力のある教師でも発生」している旨の調査結果を公表しました。10項目に分けて類型化したなかで、「教師の柔軟性を欠いた指導」と「授業への不満」が上位二つを占めています。「学級崩壊」は教師の問題につきるとも読めるこの報告は、現代の教育困難の根源を示しているとは思えません。この分析は、なぜ子どもと教師の関係が悪化してきているのかを明らかにしていません。

「学級崩壊」も最近特に話題になってきている「大学生の学力低下問題」も根は一つと見ることができるのではないのでしょうか。この二つは、子どもたちの学校離れと言う点で共通しています。なぜ学ぶのか、学ぶことが自分にとってどういう意味を持つのかなどの「学ぶ意義」をつかめないでいる子どもたちの増加に注目すべきです。韓国、中国、米国、日本で国際比較した「21世紀の夢に関する調査」(青少年研究所)によると、「将来の夢がない日本の生徒」というのが最大の特徴になっています。21世紀が希望ある社会になると考えている日本の生徒は35%です。犯罪・非行が少なくなると考えている中学生は11%です。学ぶ意義が理解できないと応えている生徒は中学34%、高校37%です。いずれも4カ国で最低の数値です。この結果は、和光の6年生の意識からも頷けるところがあります。6年生は、「私たちの生きている時代」の重大な出来事に、1位阪神大震災、2位地下鉄サリン事件、3位淳君殺人事件、4位カレーに毒を入れる、5位「0-157」

食中毒をあげています。「数が多いのはみんなこわいことばかり」と話しています。こつこつ学べば将来が開けるなどと思っていない子どもが激増しているのとらえることができるのではないのでしょうか。

子どもたちの深部にある知的要求は、こうした現代社会の実態を強く反映しているように思います。子どもたちは何をどのように学びたがっているのでしょうか。私たちは、今までの授業づくりの経験から次の3つのことが言えるのではないかと考えています。第1は、子どもたちは、現代社会が不安であるだけに、自分たちの生きている今を知り、未来への希望を持ちたいという強い要求があります。「なぜ学ぶのか、どう生きるのか」の根元的な問いに対する答えをつかみたがっています。第2は、生活実感の持てないバーチャルな社会に生きている子どもたちは、何のために学ぶのか、学んだことが自分にとってどのような意味を持つのかなどの学ぶことの意義を持てないでいます。「つまらない・わからない・役立たない」という形式的な学習ではなくて、現実の世界と結んだ実質的な学習を望んでいます。第3は、多くの情報を押しつけられて受動的な学習を余儀なくさせられている子どもたちは、先生に教えられるだけでなく、自分の力で考え、友だちといっしょに問題を解き明かしていく参加と共同の授業を望んでいます。和光鶴小の子どもたちは総合学習が大好きです。それは、こうした学びの願いに合致しているからだと考えています。

(2) 新学習指導要領の検討

【1】小学生をバカにするな

完全学校五日制の新学習指導要領の特徴は、「総合的な学習の時間」の新設と「指導内容の3割厳選」と「選択の時間」の増大に見ることができます。これまでに比べると、各学校がそれぞれの特色を打ち出すようにと、何よりも規制緩和を打ち出しています。自由の幅が大きくなることは結構なことですが、その問題点をしっかりと見ておくことは、これからの対応を間違わないためにも大事なことです。

この路線は、83年の中曽根臨教審路線の延長であることを見ておく必要があります。当時、校内暴力、自殺、登校拒否の広がりを「教育の病理」ととらえ、その原因を憲法教育基本法の「教育の機会均」等に求め、「画一的」な日本の戦後教育制度をやり玉に挙げました。それに対置するものとして、自由化・個性化による「個人の尊厳」を原則とした「競争の原理」で乗り越えろとしたのです。教育の民営化路線です。この路線上に現代の動きを照らすと、その目的と方向がよく見えてきます。

新学習指導要領をめぐり、「小学生をバカにするな」(アエラ)「子供の学力は低下しているか」(論座)などで、学力低下問題が取り上げられています。「新学力」と「旧学力」をめぐる対談(論座)での文部省政策課長の寺脇研氏の発言の中に、今回の新指導要領の本

音らしきものを見ることができます。

「日本の中間層の学力が低下していく」昔はすべての子にできると子になってほしいという美しいフィクションがあってすべて押しつけてきたが、これからは学力分業論という考え方でいい。

「義務教育レベルの基礎的なものはどうなるのか」小中学校でゆったりするが高校大学では死にものぐるいで勉強してもらえないはず、トータルでは決着がつく話だ。2002年以降は時間無制限でやれば全員100点がとれなければおかしいことになる。

「今までの教育ではまずいというコンセンサスがあったのか」文部省に任せずに臨時教育審議会をつくって教育改革を議論しようという動きは国民の側からおこった。戦後のシステムが50年後の今、合わなくなった。

「5分でできること3時間かかる子がいる」指導要領は全員に共通して教えるミニマム（最低線）だ。できる子が次をやっても問題はない。いっそう幅を持たせた。

以上のように、「3割厳選」「選択制」の方針は学力分業論でつじつまをつけているのです。3割厳選して残された内容は、アエラで「小学生をバカにするな」といわれるくらい「基礎・基本」と呼ぶにはほど遠いものですから、どの子にも基礎的・基本的な力を育てることを放棄した指導要領といっても過言ではないでしょう。

【2】何をどのように教えるかは問題外でいいのか

「総合的な学習の時間」は、規制緩和によって学校の特色をつくり学校間競争を組織する目玉の時間となるでしょう。学校間競争は、学区域の自由化としてこの春から、品川区で始まります。文部省は1999年11月、文部省指定の研究開発学校や特色のある教育活動を行っている全国60校の取り組みをまとめた実践事例集を刊行しました。この本をみると、今、進められている「総合的な学習の時間」の概要が見えてきています。ここでは、18校の文部省開発指定校の特徴を分析してみます。

「国際理解、情報、環境、福祉健康などの横断的・総合的な課題」「児童の興味関心に基づく課題」「地域の特色に応じた課題」で全てくられる。

	文部省指定校	60校全体
国際理解	6	12
情報	3	11
環境	1	15
福祉健康	3	10
地域	3	24
興味関心	2	8

・国際理解では英会話体験の数が多い。パソコンではネットワーク・メール・ソフトの活用・ホームページづくりの活動が共通している。環境では川の学習や花いっぱい活動、福祉健康ではいのちの学習やバリアフリーの学習、地域では郷土学習などがある。

今日的な問題を探究する学習ではなくて、学び方の追究が強調されている。

・ふれる つかむ しらべる まとめる

・ふれる つかむ むかう いかす

「どんな内容」を「いかに学ばせるか」ではなく、新しい学力観としての3つの知（内容知、方法知、自分知）である。知とは、子ども自身に生きて働く知となるもので子どもの側からとらえた学力である。（学芸大附属大泉小学校）

したがって、...平和の課題を追究する学校は一つもない

...食を取り上げた実践はあるが生産者や今日の食品問題・食糧問題にはせまらない。

...お年寄りや障害者はとりあげるが、人権や差別、いのちの尊厳にはせまらない。

...健康を取り上げるが「人間の生と性」や「現代文化」にはせまらない。

...環境は取り上げるが、自然と人間の共存の課題を深めるのではなく、一人ひとりの心がけの改善が重視される。

その他文部省研究開発校ではない学校の中に、地域を流れる川と森林の環境に果たす役割にせまる注目できる実践がありました。雪の調査では酸性の雪（雨）が降るのに、山からの湧水のPH調査では酸性は確認できない、それには腐葉土や腐肉を分解する多くの生物（昆虫）の存在が関係して環境をよくしていることを実験を通して解明していく実践です。学習の広がりとしては、「カキの森を慕う会」の植林活動、昆布漁の復活をめざす「えりも治山事業」、「森は海の恋人」活動などを学びます。理科の発展として「自然環境と人間生活」を豊かな実体験を通して学ぶ総合学習のように感じられます。しかし、こうした実践は、60校の中にはきわめて少ないというのが実態です。

（3）学校を変える・子どもが変わる・・・共同の広がり

以上見てきたように、新学習指導要領は、「学びの実感のある学校」を求める子どもたちの願いを受け止めているとはとても言えません。和光をはじめ、民間の学校実践で以前から追求してきた総合学習とは、目的も内容も違っているのだということです。総合学習は、

子どもの学習からの逃避や授業の不成立、子ども同士の間関係の実態から目を離さず、子どもの率直な問いや現代社会の問題から出発する学習です。現代社会の今日的な問題に、未来の市民として自覚的にせまろうとします。その中で、問題解決的で能動的な学習の力を育てようとしています。文部省の実践事例校とは違って、学習指導要領の文章では各学校で学校や地域の特色を生かした横断的・総合的なすすめるとなっているのですから、私たちは、子どもにとって学びの実感のもてる総合学習を探究すべきだと考えます。

子どもたちの困難克服のためには今の学校を変えなければならないという声は、国民的なものです。その教育改革の焦点に、私たち民間の側が作りあげてきた総合学習を位置づける、実践づくりの共同がひろがってきています。和光（両小学校）へは、今年度、約30の都道府県の団体、研究会、学校から120件を越える講師要請がありました。また、学校をあげて訪問してきた学校も数校あります。私たちは、和光が必要とされている今日的な状況と受け止めて、対応してきました。

3、下からつくる教育課程「総合学習を創る」

和光鶴川小学校は、今年、「総合学習の計画と実践」を3冊の本にまとめました。「おどろき・はっけん生活べんきょう（1・2年）」「はじめての総合学習（3・4年）」「自分づくりの総合学習（5・6年）」です。この3冊の本は、鶴小が一貫して進めてきた「下したからつくる教育課程」における総合学習の発展を示しています。総合学習の内容と方法を子どもの発達と関わってまとめました。本づくりを通してここ3年間ほどの実践をまとめながら、新しい気持ちで今年の実践を進めてきました。私たちは今年度を迎えるにあたって、「子どもはどのようにして自分自身の課題をもつのか」「一人ひとりの学びはどのようにしているのか」「共同で深めるとはどういうことか」「リアリティーのある学習とはどういうことか」「子どもの学習と表現活動の多様な発展」など、課題をもちました。今年もまた生きのいい実践が創られてきました。

（1）五感を働かせ事実認識の芽を育てる生活べんきょう

人間の認識発達には感覚 知覚 表象 概念 法則と進むといわれています。物事を分かっていく上で、五感を十分働かせることが特に大切です。子どもは本来、周りの世界に興味津々です。あれおもしろいな、不思議だなと思うことをいつももっています。この子どもの感性を、遺憾なく発揮させたいと思います。

私たちは低学年期の教育課題を次のように設定しています。

遊びや日常生活を通して子どもたち同士のつながりを形成する。

書く、話す、聞く、描くなどの自由な表現活動を共有する。

自然や社会に対する新鮮な感動や調べてみたいという興味を育てる。

さまざまな学習活動、特に芸術的な活動によって豊かな感覚感性を育てる。

発達に応じた手仕事や労働を通じて手や指の巧緻性、からだの均衡をつくる。

低学年で週6時間組まれている生活勉強の課題を次のようにおいています。

低学年では原体験をくぐる活動の価値をより重視して位置づける。分析をやったの総合ではなく、未分化の段階での総合を大事にする。

和光が生活べんきょう（1975～1984までは低学年総合）に取り組んでから25年たちました。この間に、主題領域が具体的になってきました。私たちは5つに整理しています。

自然に関わり自然を感じ取る学習領域

つくる・育てる・食べる学習領域

家庭・地域に関わり人を学ぶ学習領域

からだを学び人間理解を広げる学習領域

人間の文化を学ぶ学習領域

生活勉強では、五感を働かせて事実認識の芽を育てることを重視しています。「はっぴょうの時間」は、子どもたちのはてな？不思議？やってみようという、周りに働きかける意欲を引き出す場になっています。下鳥実践によれば1年生の1学期だけで181件の発表が行われました。（おどろき・はっけん生活べんきょう）下鳥先生は、子どもの発表を「動物（虫・鳥など）」「植物（種・実・花など）」「いろんなモノ（食・貝・石など）」「人・家族・出来事」「作ったモノ」に分けて分類しています。こうした発表の中から、共同の学習のテーマが生まれてきます。

今回、低学年分科会で報告される諸喜田実践では、9月になって持ち込まれた「どんぐり」から、指導計画を立ち上げて、どんぐりの種類を調べたり、笛をつくったり、おもちゃをつくったり、団子にして食べたりして豊かな学習を展開しています。ドングリ虫の正体せまる1年生は、まさに小さな科学者です。以前、5年生の理科を一クラス教えたことがありました。動物が子孫をのこしていく仕組みを学ぶ入り口の問題が「ドングリ虫」でした。「シャーレの中に拾ったドングリを入れておいたら虫がでてきました。この虫はどこから来たのでしょうか。ア・虫が自然に湧いてきた、イ・虫がドングリの中からでてきた。」「他のドングリを割って中を見ると虫がいました。虫が入ったような穴はどこにもみあたりません。この虫はのどこから入ったのでしょうか。ア・ドングリから虫が生まれた。イ・ドングリの中に卵があってそこから生まれた。」...それではその卵はどのようにして入ったのでしょうか。...と、探りながらゾウ虫の産卵の仕組みを知り、「親のない子はいない」こ

とを学習していきます。5年生では、そこを入りに、昆虫、魚、哺乳動物それぞれに違った仕組みのあることをつかんでいくのです。もちろん生活べんきょうではそこまで学習を広げません。しかし、諸喜田先生のクラスの話聞いて、1年生のもつ仮説も、5年生のもつ仮説も同じだと思いました。1年生のうちからこうした事実にもとづく「はてな？不思議？の体験」を育てることは、本格的に科学を学ぶ上でも価値あることではないかと思いました。問いがないところに学習の発展は無いのです。

生活べんきょうの学習計画の幹は、ベーシックプランです。毎年、1年生の秋に麦を蒔き、2年生になって「麦からパン(うどんのこともある)」の実践に取り組みます。教師があらかじめ計画したプログラムであっても、問題が子どもたち自身の課題になったとき、子どもたちの学習は一人歩きしはじめます。パンの実践で、子どもたちが教師の枠を越えて一人歩きしはじめたのは、パンづくりのコツを五感を通して確信を持ったときでした。子どもたちは、生地をどれくらいこねたらいいかがなかなか分かりませんでした。マニュアル本で、時間や回数で説明されても、耳たぶくらいのかたさといわれても、なかなか分かりませんでした。ところが、パン屋さんでいっしょにこねたとき、「ほら見てごらん、両手で広げて薄い膜が広がるくらいにこねるんだよ。これがグルテンなんだ。」という話にとっても納得しました。子どもたちの知りたかったのは、五感に関わる部分だったのです。やってみて分かることをつかんだのです。このコツは全部の班に広がりました。それからというもの、子どもたちはいちいち先生に聞くこともなく、「グルテン・グルテン」といってどんどん作り始めたのです。子どもたちは自分たちのパンをパン屋さんにもって行って見てもらいました。これほどほめられた年はなかったようです。子どもたちは自分たちの学習の価値をパン屋のおじさんに認めてもらって、大満足でした。

「生活科と総合学習はどのように関係するのですか」という質問をよく聞きます。和光の教育課程では、生活べんきょうは総合学習に対応する学習領域と定義づけています。生活べんきょうの5つの学習領域は、現代の人間として生きていく上での今日的な問題に関わる領域です。中学年・高学年に発達するにしたがって、課題性が鮮明になってきます。私たちは「価値ある生活科」の発展として総合学習を構想すべきだと考えています。

(2) 地域へとびだせ探検学習

私たちは少年少女期の教育課題を次のように位置づけています。

不思議の時代から冒険の時代へ...低学年期を不思議の時代とすると中学年期は冒険の時代といえる。子どもたちの興味と関心はいっそう飛躍しダイナミックな学習を可能にする。

見通しをもってやる時代へ...低学年はやること自体を楽しむが、中学年になると見通し

をもって取り組む力が急速に形成される。失敗をおそれず実践し失敗から学ぶことを通して新しい学びの力を形成する。

知識の時代へ...知識概念がどんどん広がる時期である。歴史的観念、地理的観念、因果の観念、数観念、運動観念などの人間の知性のもとになる観念(母観念:ドベス)を、感覚的、経験的な事実と結び合せて育てる教育を大事にする。

友だちつきあいの時代...認識においても行動においても仲間との関わりが重要な要素を占める時代である。学習活動を通しての共同学習の力の形成や仲間理解・人間理解の深化が課題になる。

その上にたつて、中学年の時期の総合学習の課題を次のようにしています。

3年生...基本的には低学年の延長と考える。緩やかな課題性をもった学習とする。自治的・文化的な活動も取り込んで豊かな体験活動とする。

4年生...環境問題など、今日的な課題性を意識した学習をはじめ。しかし、あまり無理せず、子どもの目線にあった学習を展開する。3年生と同じく、豊かな体験学習を展開する。

3年生は、たんけん学習が大好きです。夏休み発表会で発表された「桑の葉大研究」を前にして、大川先生は職員室で、驚きの声を上げていました。きっかけは、4月の桑の葉の授業でした。葉脈の模様・厚さ・手触りなど五感を使った、桑の葉と桑の葉に似た別の葉を見分けるところから授業を始めました。学校の周りの桑の葉探検を経て、桑の葉地図をつくりました。その後、子どもたちは家の近くから桑の葉を持ってきて、桑の葉名人(小菅先生)に鑑定してもらいました。合格した子に、飼育許可書が渡されました。教室に持ち込まれた桑の葉について確かめているうちに、周りに切り込みがついた葉と丸い葉の謎が持ち上がりました。「ギザギザが雄の木で、丸いのは雌の木」という子と、「切れ込みは蚕を飼っている人が食べやすいように考えた木だ。」という子の対立した情報が持ち込まれました。先生は「いずれにしても、桑の木は3000種以上あるんだって」とまとめておきました。この授業がきっかけに、一人の女の子が桑の葉研究を始めて3ヶ月たって答えを見つけてきたのです。厚木の試験場に行って100種類以上の桑の葉と30種類以上のまゆをもらい、標本にして発表したのです。桑の木は接ぎ木によって品種改良が行われてきたのです。

蚕の学習は、「準備の時期」「飼育の時期」「つくりかえる時期」がありますが、桑の葉探検は準備の時期にあたります。飼育が始まると、観察と飼育に集中します。何しろ、和光鶴川小学校の3年生は1万頭を超える蚕を飼育しますので並大抵ではありません。桑の葉やり、食べた後や糞の掃除、など世話の仕方一つひとつが成長に大きな影響を及ぼします。

5 令近くになると必要になる桑の葉の量は膨大です。朝、学校の玄関にたくさんの桑の葉が積まれています。先生が早朝にとって来たものです。子どもたちは班で育てているカイコに与えます。子どもも先生も塾蚕を喜びます。子どもたちはこうした飼育労働をしながら、ケゴから5令、繭、カイコ蛾になるまでを観察し記録します。この間に、カイコ農家や蚕糸試験場の見学を行い、学校での学習で浮かび上がった問題や疑問を解いていきます。

子どもたちからカイコ情報が届きます。今年も、「桑の葉茶」、「シルクうどん」、シルク製品の衣料などが教室に持ち込まれ、カイコと人間生活の結びつきの深さを楽しく学びました。また、9月からは、糸をとる、繭玉人形をつくるなどの、繭を使った学習が広がります。こうして、子どもたちは、生物としてのカイコ、生産活動としてのカイコ、人間の暮らしとカイコの関わりを興味深く学びました。

3年生の2学期後期からの総合学習は、地域を対象にした総合学習です。今年も、黒川地域から子どもとともに学習課題を見つけ探究することにしました。「黒川発 追え」がそうです。1組は「牛乳」、2組は「柿」になりました。3年生分科会では「黒川発牛乳を追え」が報告されます。社会科の地域探検で子どもたちが強く興味を示した「牛小屋」から、総合学習の構想をふくらませました。市川さんの牛乳はどこへ行くのかを探ることを軸にして、子どもたちの関心は「牛」「牛小屋」「市川さん」に関わるいろんなことに広がりました。この学習のプロセスで、地元で牛にこだわる人、牛乳にこだわる人との出会いがありました。たんけんすればするほど学習が発展しました。バターづくりや牛小屋掃除の体験も貴重だったと思います。

地元の特産品、禅寺丸柿に着目し、学習を広げていった2組の子どもたちも柿に夢中になりました。「どうして禅寺丸柿はお店で売ってないのか...黒川インタビュー」「柿を使った食べ物シリーズ」「干し柿シリーズ」などと、子どもたちの知りたいことから出発する学習は、「シリーズ」という学習の節目ができて進んでいきます。

「JAの大森安吉さんへ...家の近くのスーパーで大森さんのあんぼ柿を買いました。とてもおいしかったです。教えてください。 なんてあんぼ柿という名前、 どうやってつくるのか。(あんなにやわらかく) どうして種がないのか、 できるのにどれくらいかかるか、 つくるのに大変なことはあるか、 いつあんぼ柿はつくられたのか、 他に柿をつくっているか。こちらにはワインやお菓子があるけど...」と、手紙を出して調べる子ができました。江戸時代あまほし柿と言った。 明治時代からあんぼ柿と言った。 福島県柳川町の特産。 11月頃から、とって1週間おいてつくる、 いぶしてから干す。(黒くなるのを防ぐ)そして、料理では、柿のチラシ寿司、トースト、天ぷら、正月料理の大根なますに入れるなどが分かりました。先生は、「手紙を書くといろんなことが分かりそうだね。

3学期には、みんなの知りたいことを中心にして柿のべんきょうを続けていくよ。」と呼びかけていました。

4年生は、毎年、鶴見川を対象に学習を進めています。対象は同じでも、子どもと教師が違くと、毎年新しい実践が生まれます。今年の4年生は、4月の鶴見川アンケートから学習をはじめ、鶴見川の現地探検を5回以上組みました。その回ごとに「地図学習」「新聞づくり」「コイを捕まえる大作戦：メダカ？発見」「6つのなぞ」「もっと遊ぼう・ブラックバスの発見」「今までにない魚を捕まえよう」とテーマをもって取り組みました。探検の後、新聞、本、紙芝居、ペープサート、カレンダー、版画葉書、など大変多様な表現で学習をまとめました。今年は、一つの事柄が学級全体の問題解決課題になって発展していく学習に注目させられました。9月の探検でブラックバスを捕まえたことから、子どもたちは在来種を駆逐するブラックバスの是非をめぐる討論をしました。琵琶湖のブラックバスや「ふな寿司」が教室にとどくなど、この学習が親も含んだ学習となっていることが伺えました。また、ギバチという絶滅危惧種の発見から「町田の谷戸の魚たち」を研究する岸先生と出会い講演を聞く会がもたれました。川探検を通してつかんだ具体的な事実から「自然と人間の共存」を考える総合学習になっていると思いました。

(3) 根元的な問いに応える総合学習

「子どもから出発する」ということは、子ども任せにすべきだということではありません。むしろ、今日的な課題を明確にした課題設定を明確にし、子どもとともに問題解決にせまろうと言う立場です。物事の真理に迫る点では、教師に全ての答えがあるのではなく、子どもも教師も同じ位置にいることをふまえようと主張する立場です。高学年になるほど、ともに学び生きる課題を共有することが大切だと考えています。子どもたちは、現代社会に対して敏感で多くの不安を持ち、実感のある学びを求めています。なぜ学ぶのか、学んだことがどれほど意味を持つのかなどを掴みたがっています。今を知りたい、自分を知りたいという強い要求をもっています。高学年では、こうした根元的な問いに応える総合学習を進めたいと考えています。

総合学習の課題を次のようにしています。

5年生...現代的な課題を子どもとともに追究する。『食』と『性』からテーマに迫る学習をつくる。

6年生...生き方に引きつけた学習が可能である。『沖縄』を通して「いのちの尊厳」に迫る学習を展開する。

5年生では、「総合学習としての食と性」を次のように考えています。

<総合学習としての「食農」教育の意義>

食べることは人間生活の基本である。体験細りで実感のない生活を余儀なくされている子どもたちが、からだを通して学ぶ意味をつかんでいく。

食に内包されている人間の生活文化と生きる知恵を学ぶ、事実による本物志向の教育。身近な事実から食品や流通の問題をとらえ、より良き消費者・生活者の力を育てる。

いのちにつながる人間の生産労働の価値を学ぶ

<総合学習としての「からだと性」>

自分のからだを学ぶことを通して、自己の尊厳を学ぶ

人間が生き続ける仕組みとしての性を学び自分の成長や変化を科学的に知っていく。

男の子女の子の社会的なあり方を考え、相互理解と協力、人間の尊厳を学ぶ。

今年は、1組が「やきとり」、2組が「そば」を通して「食を通してみる現代」に迫ってきました。分科会では「鶏肉」が報告されます。加川先生は、鳥は身近だし、子どもも好きだし、独自の文化があるからとプランを立てて開始しました。第1回「本物のやきとりを焼く」授業をしました。子どもたちはいろんな焼鳥屋さんを訪ねて情報を集めました。はじめは活発だったのですが、なかなか広がりませんでした。加川先生もどうしたものか悩んでいました。夏休みに教師の研究合宿で検討しました。「やきとり」が展開しにくい原因が見えてきました。「やきとり」には「鶏肉」「炭」「竹串」「たれ」という質の違う素材が複数あって、それぞれの素材には現代的な問題はあっても、クラスみんなで問題解決学習するには分散しすぎて見えてこないということです。教師は、食を通して何を見せたいのかを討論し、「鶏肉」にテーマを修正したらどうかと結論がでました。加川先生は夏休み中、鶏肉研究を展開しました。「プロイラーの裏にある穀物メジャー」「国産銘柄鶏マップ」などたくさん発見がありました。夏休みが終わってみると、子どもたちは教師の心配をよそに地鶏を調べたり、鳥の模型をつくったりと「鳥」に集中していたのです。加川先生が手に入れた資料を子どもも手に入れてきていました。教師の研究会の結論と子どもの結論は一致していたと加川先生は語りました。2学期、そこから、新たなやきとりも含む「鶏肉」研究が始まりました。

6年生の総合学習では「沖縄」と「在校生に残す一冊の本」に取り組みます。

<総合学習としての「沖縄」>

自然・文化・歴史を通して日本という国を広くとらえる。

唯一地上戦のあった島で「命どう宝」(ヌチドゥタカラ)を学ぶ。

基地の島沖縄の問題を学ぶ。

沖縄に立ってアジア・世界との連帯の課題をつかむ。

現代を生きるいのちと平和の問題に取り組む。

< 在校生に残す 1 冊の本 >

小学校の総合学習で身につけた学ぶ力を総動員して取り組む一人ひとりの総合学習

6 年生は、「私たちの生きている今」「東京の基地」「沖縄の踊りや料理など暮らしと文化を学ぶ」「15 年戦争の歴史」などの学習を経て、10 月末に沖縄学習旅行に行きます。沖縄を語る総合学習分科会は、今年は運営上の都合でもたず、『食』に集中することにしました。また、「在校生に残す 1 冊の本」は一人ひとりの興味と関心の多様さが現れているだけでなく、教師の力を越える子どもたち固有の世界が表現されていて、大変貴重な財産が形成されつつあります。

4 , 総合学習の拓く可能性と克服しなければならない課題

学級崩壊は、形式的な知識の暗記競争の場となってしまう学校に対する、子どもたちの異議申し立てのように思います。「つまらない、分からない、役立たない」という現代学校の問題点を克服することは国民的な課題になっています。2000 年代学校はどのように変わらなければならないのでしょうか。

和光の子どもたちは総合学習が大好きです。子どもの学びの事実から、子どもたちがどのような学習を望んでいるのかが見えてきています。

はてな、不思議、何だろう、やってみたという謎解きや試行錯誤ができる学習
調査・制作・創作活動ができ失敗の許される学習。

いろんな人と出会えて、いろんな人から学べて、答えが一つでない学習。

生きている今を知り、自分を見つめることにつながる学習。

また、子どもたちの学びの特徴も見えてきました。

課題が子ども自身のものになったとき、教師の枠を越えて学びはじめる。

子どもの問いの発展は、集団の中では不均等であり、らせん的に広がり高まる。一つのことに分かると新たな問いが広がり新たな学習が始まる。

こんな子どもたちの学びの姿の中に、私は、総合学習の可能性を見ることができるのではないかと考えています。

第 1 に、総合学習は子どもの学ぶ学習対象が、教科書の中だけではなくて、身のまわりにたくさんあることを教師も子どもも実感します。詰め込みが強調される学校は、知識の対象はすべて教科書の中にありました。だから、教科書を学び、理解し、覚えることが要求されました。しかし、総合学習は、子どもたちが目にし、さわることのできる、身のまわりの自然や社会や人間の出来事に価値ある学習材がたくさんあることを示しています。

教科書のイメージが変わるのではないのでしょうか。

第2は、総合学習では、学ぶとは、発見し、体験し、伝え、考え、そして新しい問いをもつことだということが鮮明になります。高度に情報化された社会の中で、知っている言葉は多いがやったことのあることは非常に少ない「体験細り」の子どもたちの問題が指摘されていますが、子どもは、本来、周りの世界におどろき、不思議を感じ、知的関心を寄せ、分かろうとする感覚と力を持っています。子どもたちは、小さいうちからの実体験学習で、その力を遺憾なく発揮しています。学びのイメージが変わるのではないのでしょうか。

第3は、総合学習では、能動的で活動的な学習の中でこそ、子どもたちの感性や知性が発揮されることが見えてきます。子どもたちは、教室の中での机に向かった黒板とチョークの授業から、地域に飛び出し、はてな？不思議？の感性を遺憾なく発揮して知的探究活動を展開します。そこでは、教科教育で育った基礎的基本的な知識や技能が生かされます。また、総合学習で広がった問題意識は、教科学習の大切さを子どもたちに自覚させます。総合学習と教科教育の環流で生きた知性が形成されます。授業づくりのイメージが変わるのではないのでしょうか。

第4は、子どもたちは多様な「先生」の教えの中で、学ぶ意義と価値を見いだしています。パン屋のおじさんも、かいこ農家のおじさんも、町田の谷戸の研究者も、地鶏の生産者もそば屋の主人も、みんな先生です。多様な大人との交わりが、子どもの学びには必要だということです。先生のイメージが変わるのではないのでしょうか。

第5は、総合学習では、子どもたちの学ぶ場は、校舎と教室と校庭を離れ、地域に広がっています。子どもたちの先生は担任の先生だけでなく、身近なおじさんおばさんもみんな先生です。学校のイメージが広く変わるのではないのでしょうか。

私たちは、このような広がりの中で現代学校を変える道を展望し、子どもたちとともに未来を語る学校をつくっていきたいと願っています。総合学習の拓く可能性として描いてみました。

しかし、すでに見てきたように「総合的な学習の時間」にはたくさんの克服すべき問題があることも見えてきています。下からの教育づくりを旺盛に進める上で突破しなければならない課題として位置づける必要があるように思います。

上や外からの事例集に縛られた研究でなく、それぞれの学校が子どもと地域の必要と課題から学習テーマを立ち上げる。

気軽に校外フィールドたんけん学習のできる引率条件をつくる。

つくったり、食べたり、出かけたりする学習にかかる費用の見通しをつくる。

押しつけの外部講師ではなく、子どもたちの学びから必然的かつ必要な講師との出会

いを大切にする。

5 , 和光学園・鶴小の総合学習

ここでは簡単に和光学園（小）の総合学習の基本的な考え方をまとめておきます。

ねらい... 学ぶ力を生きる力に

子どもを学習主体に育て創造性を育てる。

性 格... 今日的で学際的なテーマに取り組む。

学習スタイルは、問題解決的で体験的・探究的な共同学習とする。

課題に集中的・分析的・総合的に迫る。

自由研究や方法としての合科学習とは区別する。

総合学習は方法概念ではなくて的概念である。

内 容...横軸に8つの問題領域を設定し、縦軸に子どもの発達段階を考えて具体的な題材を決定する。教師の視点を入れながら子どもとともに進める内容決定にも挑戦している。

「からだ・健康」「食と食文化」「環境・校外」「戦争と平和」「人権・差別」
「障害・共生」「現代文化」「生産・労働」

6 , 総合学習の論点

(1)「総合的な学習の時間」と「総合学習」

すでに2章で検討しましたように、「総合的な学習の時間」本質は「公教育の規制緩和と競争」による新たな統制の目玉としての「時間」ととらえられることができます。どんな内容をいかに学ばせるかが問題ではなく、子どもにとって必要な内容と学び方が強調される時間です。それに対して総合学習は、子どもの学習からの逃避や授業の不成立、子ども同士の人間関係や生活の実態から目を離さず、子どもの率直な問いや現代社会のリアルな問題から出発する学習です。総合学習は、現代社会の今日的な問題に未来の市民として自覚的に迫り、その中で問題解決的で能動的な学習の力を育てることをめざします。

(2) 学習の題材とテーマの設定

和光では「問題領域」「題材」「主題」とも教師があらかじめ設定して指導計画を立てています。教師の指導性は欠くことができません。しかし、教師の計画を土台にしながらも、子どもの興味関心を大切にして展開を計るベーシックプランの立場をとっています。私た

ちは、一人ひとりの子どもが学びの主体として育つことをめざしています。子どもが学習の主体になるかどうかは、主題が子ども自身の問題になるかどうかにかかっています。

(3) 子ども主体の学習と教師の指導性

和光では子どもの身近な事実から学習をはじめるところを大事にしています。ところで、身近な事実を、子どもが持ち込んだか教師が与えたかで、子ども主体の学習か教師の押しつけかを二分する論があります。私たちは、二者択一論を否定し、両者を認めるべきだと思います。どちらの道を通っても豊かな展開の可能性が開かれます。また、「子ども一人ひとりの興味関心」と「共同の学習」を対立させる論があります。私たちは、共同の学習が一人ひとりの興味関心を閉塞させるという論は正しくないと考えています。共同の学習の中から個性豊かな学習が広がる事実をたくさん経験しています。子どもの関心の違いが共有されるような共同学習による問題解決学習をつくっていきたいと考えています。

(4) 教科教育と総合学習

私たちは、教科教育と総合学習が相互に環流して生きた知性を形成すると考えています。教科教育を現実の世界との結びつきを大切にしていれば取り組むと総合的な課題に必然的にぶつかり、総合学習の必要性が浮き彫りになります。また、総合学習での問題意識の高揚は、教科教育で培う知の必要を実感させ、学ぶ意欲を増大させます。和光の総合学習は、それぞれの学年で教科教育と関連しながら進んでいます。

(5) 領域としての総合学習

教育課程の位置づけとして、和光は「領域としての総合学習」の立場をとっています。これは、学習領域として「総合学習の分野」を枠として必要だと考える立場です。これに対して、新指導要領は「時間としての総合的な学習の時間」です。この時間で学ぶべき内容を問題にせず、学び方の修得を問題にしています。公立学校において内容を重視する総合学習を「機能としての総合学習」と位置づける論もあります。(和歌山大・船越勝)

「領域としての総合学習」は学校教育を総合学習、教科教育、自治文化行事活動の3つの領域で教育課程を作成する考え方です。この考え方では、3つの領域は相互に重なり合っていて、環流しながら成果を上げることをめざしています。したがって、「教科教育の総合学習化」「行事の総合学習化」の主張と共通しています。敢えて、総合学習の領域を教育課程に設定するのは、総合学習独自のプログラムが学校の教育課程に常におかれているべきだと考えるからです。

(6) 総合学習と基礎基本・共通教養

総合学習と基礎基本・共通教養を対立的に論じるべきではないと考えます。基礎基本を大切にすることというのは、学校の教育目標を現代の課題にしっかり答える内容として明確

にすること、その上で各教科の基本を目標との関係で明らかにすることです。そして、それを内容的に裏付ける教材系列と基礎を明確にしつつ自治活動の展開の保障と合わせて構築することです。歴史的にみると、学校全体が目標に向かって総合的に教育機能を発揮するための検討の中で、総合学習が構想されてきたのです。

現代を生きる共通教養もまた、今日的課題に答えた生き方との関係で語られるべきでしょう。大事なものは、「おかしい」「嫌だ」と感じて主張し、行動し、論議し、学習していく力です。権利意識と問題意識が必要です。知識の基礎には3R（読み書き算）の基礎学力があります。それと並んで、興味・関心・好奇心、みんなで共同で、心遣いできるといった能力が「教養」には大事だと考えられます。（ともに考える会ブックレット）

和光では、たとえば漢字677字に精選したり、国語アンケートから授業改革に挑戦したり、算数の自主編成で形式的な算数から実質的な算数づくりへの手作り教育を進めています。

基礎基本の教育を効果的に進めるためには、「ねばならぬ」の押しつけに感覚的に反発する子どもと学校の間をどう温かいものにしていくのかという視点を大切にしなければなりません。この視点こそ「学びの改革」の視点です。

（7）総合学習の評価と評定

総合学習は、今日的な課題をどうとらえどう生きるかに迫る学習ですので、到達目標を明確にした評定とはなじまないと考えます。私たちは現在、学校での学習の事実を伝えるカードを家庭に配布しています。評定にはなじみませんが、教育活動には評価は常につきまします。子どもは子ども同士の中で評価されたり、教師に励まされたりしながら、総合学習の学び方を発展させていきます。子どもと子どもの関係、子どもと教師の関係で、励まし励まされたりしながらよりよい学習を形成していく方法をいっそう検討したいと考えています。

豊かな学びは豊かな表現の土台を形成しています。子どもたちは、文章で、絵で、もので、体で、声で、以下のように学んだ成果を表しています。

一冊本・情報カード・研究レポートに見る子どもの姿

カイクの学習とものづくり...繭人形、生糸を染める、コースターを編む

川の学習を豊に表す...カレンダー、葉書、石に絵を描く、石に俳句を書く、コースターを染める、版画

米...農具を版画で

沖縄...シーサーを焼く、サンシンを弾く、エイサーを踊る（まだ取り上げていないが紅型、芭蕉布、ミンサー織り、琉球ガラス）

・沖縄の歌 CD 発売(秋祭り子どものお店)歌、サンシン、パッケージ

こ

うした表現活動と関連させながら、子ども同士の自己評価、相互評価の形態など工夫できるのではないかと考えています。しかしそれは、今までのような「できたできない」の評価とは全く違った形態をつくるべきだと考えています。

7、国語科からの授業改革

(1) まず 子どもから始めよう

「つまらない・分からない・役立たない」という現代学校の問題を克服する可能性を総合学習から語ってきました。それは、総合学習の実践は、週2時間ないし3時間の「時間」の授業をどうするかという問題にとどまらず、教科書や学びや教室や先生...つまり学校のあり方を問い直す問題を含んでいるからです。しかし、子どもたちの学習の8割以上は教科教育です。教科教育の改革なしに、総合学習だけで、学校が変わることはないと思います。教科教育でこそ、「面白い・分かる・学ぶ価値が実感できる」授業改革を進めなければなりません。みんなの中で分かり、でき、賢くなりたいという願いはどの子も持っているのです。

和光鶴小では、今まで算数を研究重点にして「子どもとともに作る授業」を追求してきました。できるだけ実際の本物と結びつけて授業する事で、子どもの学習意欲が高まることを確認してきました。そして、授業づくりのポイントとして、押しつけでなく参加型の授業、排除でなく共同の授業をあげてきました。今年、国語を重点研究教科において、「子どもとともに作る授業」の実践を進めることにしました。鶴小としては、国語研究は初めての事です。研究の視点も方向も、まだまだ、模索の段階です。しかし、教材研究も、授業展開の研究も、専科の先生も含めて議論百出する、全教員一丸となった楽しい一年でした。全教員が運動会と同じように3色チームに分かれて教材研究から授業案検討に責任を持ち、チーム代表の公開授業を全体研究の検討素材にのせるという、研究の仕方も精神的な『遊び』の要素を含んだ、それでいて真剣な、研究会を繰り返しました。いわゆる教科教育のスーパースターがいないことの利点が生きていると思っています。この一年の取り組みを総括する中でだんだん固まっていくものと考えています。

まず大事にしたのは、「子どもの声からはじめよう」ということでした。和光のカリキュラムは自主編成しています。今までも、子どもの側に立って、楽しくて学びがいのある国語の授業づくりの観点から教材を用意し、授業研究を繰り返してきていました。教師の意識はそうですが、子どもにはそれがどのように映っているのだろう。すれ違っているところは無いのだろうか。まずそこを掴まなければ、研究課題が見えてこないのではないかと考えました。

もう一つ大事にしたことは、民間教育の国語研究は大変多様に成果を上げてきていますが、その成果に学びながらも、一つの方法にこだわらない、鶴小の教師が目前の子どもとの授業で確信を持ったものを積み上げて、共同でつくる国語研究にしようということでした。

国語分科会の基調報告にくわしいことが書かれていますので、ここでは概略の紹介になります。アンケートから見えた特徴や課題は、

国語という教科を嫌いだと思っている子どもは予想以上に少ない。読みの授業では、作品世界を楽しみ、次への期待を持っている。

高学年では、「だだだしている」「先生の話が長すぎる」など授業への批判や作品の善し悪しについての意見がある。

作品を選び伝えることと同時に、この作品をこう読みたい読ませたいという授業展開の方法も十分検討する必要がある。

ということでした。

(2) 原則は明確に方法は多様に

和光鶴小の国語教育は、「子どもたちを日本語の豊かな語り手、書き手、そして豊かな日本語の読み手、味わい手に育てる」ことを目標にしています。その目標に向かって、教材編成の視点をつくり、作品を選び編成してきました。ここには、和光の国語研究の歴史と日本の民間教育の成果が反映していると思います。

鶴小では、今までの財産に学び、「優れた教材が、楽しく、広がりのある授業をつくる。教材研究は授業づくりの基本」という自主編成の原則を大事にしながらも、子ども参加の授業の方法は多様であっていい、どうしたら多くの子どもが授業の主人公になるのかを、目の前の事実から掴んでいくことにしました。また、どういう教材が優れた教材なのか、価値ある教材というのかも、子どもとの授業をくぐらせて検証していくことが必要だということをお大事にしました。国語部からは、一問一答式授業からの脱却を、全員が楽しく参加できる授業を、説明文教材の工夫発展をの3つの課題と方針が出されました。

(3) 作品分析は確かか

3チームに分かれた授業研究は、楽しい中でも妥協を許さず、進みました。チーム内研究を含めると、どの先生も研究授業をしたこととなります。それぞれの先生が、「子どもとつくる授業」を工夫しました。その特徴は、

子どもの疑問を軸に授業を展開 6年「北風は芽を」岡本先生

子どもが授業をつくる 6年「ヒロシマの歌」大野先生

机に向かうだけではない授業：劇化 3年「ケンはおっちゃん」大川先生

説明文教材を楽しく読む：学習プリント、発表会 5年「木曾谷のネズミ騒動」北山先生

共通とグループ発表 4年「川は生きている」山岸先生

絵にして読みを深める 6年「野尻湖のぞう」大野先生

新しいジャンルの説明文を選ぶ 2年「せかい地図絵本」下鳥先生

「北風は芽を」(筒井啓介)は、北海道の炭坑での強制労働から逃げるアン少年と百姓の正作一家、アンを追いかける監督と警察をめぐる展開する物語で、朝鮮人差別の問題を考える作品です。岡本先生は、授業プリントをつくってはじめてが子どもからの挑みかかりを感じられないでいました。一問一答式の授業になっていたことを反省し、場面を切り取って絵にしてコメントをつけ交流する授業をしてみました。すると、ハイヒールをはいてるのは変だ、アンは太りすぎ、でも骨太と書いてある、貨車に窓があるのはおかしい、足におもりをつけられていたら働けない...など、本文と関わって読みとりの違いを問題にする活発な討論が始まったのです。その後は、シナリオ化したり、演じてみたりの授業でこの作品を扱いました。岡本先生は、この実践で、子どもが作品に向かい合う条件をつくと、子どもたちは子どもたちの力で討論を展開することを掴みました。このような経験を、それぞれの先生がなんらかの形で実感できたのが今年の研究の成果だと思います。

ところで、授業の方法は、教師が深く作品を分析し、子どもに伝えたい目標がはっきりしているとき、多様に発揮されます。なぜこの作品なのか、この作品で何を子どもと一緒に考えたいのかが明確だと、どんな発問をしたら子どもからどんな発言が生まれてくるか予想できて、授業構想が固まってくるのです。私たちは、子どもの実態と関わってすすめる教材研究はますます必要だと考えています。ですから、そういった教材研究を抜きに、「子どもの反応がなかった」だから「教師の押さえないところを押しつけた授業だった」「一問一答式だった」と、目先の授業形態を変えることで問題が解決するとは思っていません。

しかし、子ども一人ひとりの読みの違いを素直にみんなの前に引き出し、その違いをめぐって討論することを通して読みとりを深め、豊に味わう授業研究の方向として、第一歩を刻んだ年と言えるように思います。

(4) 子どもの声とこれからの課題

今年、一年の総括は公開研が終わってから行うことになっています。子どもの声を、再度聞いて、次年度に向けての課題を鮮明にしていきたいと考えています。

8 , おわりに

1999年度は、和光両小学校の実践が、日本の学校の日常研究に関連して注目を浴びた年でした。1年間に寄せられた講師依頼は、30都道府県、120を超える学校、団体におよびました。「総合的な学習の時間」と「総合学習」を受け止める議論が賛否両論わき起こっていましたので、私たちは、日本の潮流が少しでも「学びの実感をつくる総合学習」へと進むことを願って、要請に応えてきました。

その中で、痛感したことは、豊かな教育実践をつくるにはそれなりの条件が必要だということでした。たとえば和光では、教師の持ち字数は週18時間です。一週間に9時間の空き時間があります。学年会はタイムテーブルに組まれています。正月、宮城県に行ったら、持ち字数30時間だという話を聞きました。和光では、学級で子どもに直接使えるお金を、年間、各クラス12万円ほど預かっています。預かり金ですから、使わなかった場合は返還する金です。担任は、そこから教育活動に必要なお金を使います。研究体制も、和光では月に3回は研究会が持てます。その上、春休みと夏休みに研究合宿を組みます。長期の休みには、教師の日直はありません。民間研究団体へ参加する場合には、ひとり約4万円くらいの研究費が支払われます。また、研究図書費は10万円を超えています。さらに、1年間に両小学校で1名ですが、長期研修を受けることができます。お金の問題抜きに「教育改革」を進める行政の問題点を指摘せざるを得ません。

しかし、その中で、職場からの創造を本格的に取り組む、したたかさと気概も学ぶことができました。たくさんある中で、例えば青森県弘前の小学校で教務主任をやっているの先生は、総合的な学習の時間とともに総合学習の学習会を持ち、職員会議の合意に基づいて、全校の子どもたちから「学びに関わるアンケート」とり、みんなで子ども分析をしました。それに基づいて、全ての先生が一人ひとりの「私の総合学習プラン」をつくり、その検討を進めています。困難を切り開く先生たちの取り組みに、私たちはかえって励まされています。また、宮城教育センターでは、「和光の総合学習」の講演をもとに、小・中の先生と研究者の座談会を組み、徹底的に和光の総合学習を分析し、宮城で学べるものは何か、疑問として残るところはどこか、それぞれどんなことを始めているかなど検討しています。それをブックレットにまとめ、宮城県に広めています。私は、両小学校の先生たちに一冊づつ配り、「和光の現在を学ぶ本」として全教職員からよんでもらっています。いっぱい学んでいます。

私たちの公開研は、いつも途中経過です。公開研究会をするのは、模範を示すためだけでなく、全国の学校に向けて開くことによって、和光の到達点を示すとともに、逆にたくさん

のことを学びたいからです。今までも、たくさん学んできました。今年もまたよろしくお
願いします。